

## 癒しの小さな旅

東京都葛飾区 大久保 昇

晴れ渡った冬の午前である。私はJR五井駅近くの菅原孝標女の像を拝した。令和六年の一月の下旬で、少し肌寒かった。その後、人々の往き来を眺めた。

若夫婦が三歳くらいの子を真ん中にして手をつなぎ、幸せそうに歩く光景があった。子どもははしゃぎ声を立てて楽しげだった。

さらに、カッブルらしい二人連れや、犬とたわむれながら歩く中年の女性など、いずれもなごやかな表情だった。

街なかで幸せをかもし出す姿は、すでに両親がなく一人身の私に深い寂しさを感じさせた。と同時に、日常の私をかえりみた。

目黒駅から徒歩三分のオフィスビルで、私は清掃の責任者として働いている。七階建てのビルをもう一つの清掃会社と分担する。我が社が地下二階から二階と七階、他社が三階から六階を担当する。

オフィス事務所内は百㎡と広く、二百台近い事務机の下を椅子と二十センチ程のゴミ箱を動かしながら、掃除機がけをする。細かいゴミや糸くず、髪の毛などが落ちていくとクレームになる。机の奥の見えにくい部分は特に注意が必要だ。

仕事は分刻み、秒刻みのスピードで作業しなければならない。

各階通路のゴミの回収やトイレ清掃もある。トイレ個室の大便用の便器では、築三十五年の経年劣化した黄ばみ汚れを落とす。常に洗剤の混ぜ合わせの研究、ブラシやスポンジでこするときは力加減など、高度な技術が必要となる。強くこすりすぎると、便器に傷がついてしまい、取り返しがつかなくなる。日々の工夫と手抜きのない地道な清掃で少しずつきれいになってゆく。

常に時間に追われるなか持病の悪化が原因で女性スタッフの一人が退職してしまった。通常は男性三人、女性四人で現場の仕事をこなしている。女性は主にトイレ清掃に従事する。

慢性的な人手不足で誰かが辞めると求人募集をかけても、三ヶ月以上も人材が来ないことが多い。そのため私は心当たりの知り合いに、ラインや電話で清掃の仕事をしてくれないか相談するが、断られてしまう。早朝六時からの勤務に加え、清掃の仕事はしたくないようだ。

良心的な会社で、本社の人たちもこまめに現場に顔を出し、私の健康面を気にかけてくれる。これまで千二百円だったパートの時給を千三百円に上げて求人広告を出してくれた。

他のパートスタッフも、自分の担当するトイレの他に辞めた人の分を少しずつ手分けしてこなし、協力的に働いてくれる。だが、七十五歳前後の従業員が多く体調不良で休むことが多い。そのため、優良企業でありながら現場はブラック企業的な働き方となる。

この状態で私が休むわけにはいかない。常に健康には留意している。たとえば、咳が少しでも出れば、すぐに病院に行き咳止めの薬をもらう。毎日検温をし、熱が三十七度を越えたら出勤出来

ない。そこで、熱さましを常備している。この他にも、吐き気の薬、トローチなどを揃える。だが、休日出勤に加え職場近くのインターネットカフェからの出勤も増えてきた。

精神面のダメージも大きくなった。十三年前に父を、三年前に母を亡くし、心が晴れない日々が続いていた。仕事疲れのダメージが倍増する。このままでは、うつ病になりかねない。

私はふと孝標女の像前に気持ちに戻った。孝標女は、『更級日記』の書き出しで上総の国から京の都まで九十日間もの旅をしたと記している。富士山の雄大さに心を打たれ、大らかな気持ちになったことであろう。また、浜名湖で見た波に感動している姿も描かれている。

わずか一日の小さな旅に出れば、少しは気が晴れるかもしれない。そう思い立ち孝標女像に会いに来たのだ。

これから、小湊鉄道で高滝駅まで行き、市原ぞうの国と、併設されているサユリワールドに行ってみよう。今の私は、心に癒しを求めている。

小湊鉄道に乗車すると、冬の田んぼが広がる。民家はほとんど見えないが、私はこの風景にあるなつかしさを感じた。車掌さんは切符を売り歩き、持っていない人は直接購入する。

私の両親は茨城県の下妻出身だった。小学生の頃、昭和五十四年当時、取手駅から関東鉄道常総線で下妻駅に向かった。あたり一面は田んぼだった。その景色に心がなごんだ記憶がある。そのときも車掌さんが切符を売っていた。小湊鉄道の車体は、当時の常総線に似ている。陽だまりがあり、冬のわりには車内が暖かかつ

た。

降車するとき車掌に切符を渡す。そのときに、「ぞうの国に行くのなら、電話すると迎えに来てくれますよ」と、親切に教えてくれた。

私は、インターネットで送迎バスの時刻表を調べていた。九時四十八分と十時四十六分が記されている。九時五十三分に高滝駅に到着したので、十時四十六分まで待たなければならぬと、がっかりした。車掌さんの一言を信じて、ぞうの国に電話をかけると、バスは十分程で到着した。

車掌さんの機転に感謝すると共に、インターネットに頼りすぎるのは良くないと感じた。

送迎バスの運転手は、高滝湖や美術館の説明してくれた。若さぎ釣りが大好きと楽しそうに話してくれた。職場やその他の住民も心の暖かい人が多く、市原はとても良い所と話していた。

「私は、葛飾区の柴又に住んでいます」と告げると、

「寅さんが大好きで柴又には何回も行った」と答えてくれた。

わずかな時間だが、二人の間で話が弾み、入園前から楽しいひとときが過ごせた。

ぞうの国に入園して道なりに進むと、ぞうが鼻を上げ下げして歓迎の挨拶をしてくれる。そのまま真っ直ぐに観客席の前を通り、トナカイやラマの飼われている所まで進む。トナカイは大きな口を開けて、この私を見ていた。日本猿は近づくと、すぐ、

「キーキー」

と大声を張り上げる。喜びの声なのか、威圧する叫びなのかは、読み取れなかった。私は猿から目をそらした。

十一時から砂の敷かれた広場で、ぞうのイベントショーが始まった。七頭のぞうの背中には一人ずつ七人のスタッフが乗る。まずは広場を一周歩き、お客さんに挨拶をした。

最初は小学一年生くらいの男の子や女の子が、太い鼻にぶら下る。終了すると、二人とも大喜びで両親の待つ席に戻っていった。

楽器の演奏ではぞうが鼻を巧みに使ってタンバリンやハーモニカの音を出す。何百回もスタッフと練習を重ねてきた成果だ。練習が足りないといふと、楽器を落としたり音が大きくはずれたりとお客さんの前で失敗するリスクがあるからである。

ぞうさんのお買い物では、鼻にお札を乗せると、ぞうがそれを受け取り、かわりにぞうのぬいぐるみ子どもたちに鼻で渡す。周りの子どもも一緒に喜ぶ、ぬいぐるみが次々と売れていった。

ぞうさんのお絵書きでは鼻で絵筆を持って画用紙に描いてゆく。雪だるまや山茶花の絵が上手に描かれると、客席から大歓声が上がった。

ぞうさんにとって本来であれば、困難な仕事のはずである。それをわずかに二、三分でしかも多くの観客が見守る緊張のなかで絵を仕上げる。スタッフ、ぞうさん共々厳しい修練があったのではなかろうか。スタッフとぞうさんとのプロ意識を強く感じた。

ぞうの国からサユリワールドへは、十分おきくらいに循環バス

が送迎してくれる。実に便利である。

サユリワールドという名前は、園長の坂本小百合様にちなんでつけられた。入口となる茶色の小屋風の建て物の前には、カンガルーのオブジェや石で作られたうさぎとカメがあり、気持ちを高ぶらせてくれる。

バナナとニンジンの餌を買い、園内に入る。土と石畳の広場にうさぎやカメ、カンガルーなどが放し飼いにされ自由を満喫している。サユリワールドは動物たちと身近に触れ合えるのが最大の魅力だ。私は、癒されると思った。

カンガルーが跳びはねながら近づいてくる。餌目当てなのでバナナを差し出すと、一気にかぶりついた。愉快だった。

この先、広場の石畳をニワトリ小屋の方へ進んで行くと、うす茶色のかわいらしいうさぎが近づいて来た。ニンジン差し出す。私は、食べている隙に背中を撫でるつもりであった。ところが、ニンジンをお口にぐわえたまま、走ってうさぎ小屋に戻ってしまった。残念である。何としようさぎを撫でてみたい。

何かうさぎを撫でる良い方法がないかと、あれこれ考えてみた。そうだ、石畳の上にニンジン置いてみよう。

幸いうさぎが来て、その場でニンジンを食べ始めた。みるからに、夢中に食べている。ここはチャンスと考え、私はうさぎの背中を撫でた。食べ続けていてうさぎは逃げなかった。

このとき、やさしかった亡き母との楽しいひとときを思い出した。私は幼少の頃、東京都文京区で育った。両親は茨城県から東京に出て来ていた。四歳のとき、母に連れられて上野動物園に行つ

た。今日と同じような茶色のうさぎがいた。かわいいと思いがらも少し怖くて触れることが出来なかった。でも何とか触わりたいと私は思った。

私の気持ちを察したのか母が、

「怖くないよ、ほら、かわいいでしょ」

と私の手を持って背中を撫でさせてくれた。その撫でる力加減が適切だったのか、うさぎが気持ち良さそうに目を閉じた。それから自分一人でも、うさぎを撫でられるようになった。

私の心は上野動物園から、サユリワールドに戻った。

「コケッココー」

と、何度か鳴き声を聞いた。ニワトリ小屋に行ってみる。七、八匹のニワトリが歩き回っている。飛べないにも関わらず、ときおり羽をばたつかせる。銀色のボールに入れられた餌を食べている。小学生の頃、両親の実家である結城郡八千代町に帰省すると、ニワトリと会えた。二メートル四方の小屋に二匹のニワトリを飼っていて、朝は鳴き声で目覚めた。小屋の一番手前には、餌を入れるプラスチックの入れ物がついており、父に教わりながら私もそこへ餌を入れたものだった。

ニワトリは餌を良く食べて卵を産んだ。その卵を父が私の手に乗せてくれた。母は産みたての卵で、卵焼きと卵入りの味噌汁を作ってくれた。自給自足の卵で作った母の手料理は格別のおいしさだった。

私は亡き父と母と久しぶりに一体化した心境になった。

帰りも来たときと同じ運転手の方が送迎してくれた。

「高滝駅には切符の販売機がないので、列車に乗ったら、車掌さんから切符を買って下さい」

と、丁寧の説明してくれた。おかげで戸惑わずに小湊鉄道に乗ることが出来た。

五井駅でもう一度降り、喫茶店で『更級日記』を再読する。孝標女も九十日間の旅から帰った後、乳母や義母、姉の死に遭遇する。宮仕えや結婚を経て、夫や子どもの出世を願う。だが、やつとのことで信濃守になった夫が急死し、孝標女は悲しみに暮れる。

『源氏物語』を読みふけたが、もともと仏教を学んでおけば良かったなと後悔する。仏教の教えである輪廻転生を信じ、来世に夢をつなぐようになる。

輪廻転生が本当にあるとすれば、命は無限であり肉親の魂は生き続ける。そう考えると、両親のいない悲しみが、少しは柔らいだ。

小湊鉄道の車掌さんは、切符を車内で売るとき、丁寧に乗客と接しながらも、手早く仕事をこなす姿が印象的だった。

私が高滝駅で降りるときは、送迎バスへ電話するように気配りをしてくれた。通常の業務を素早く的確にこなしたうえで、不測の事態にも機転を利かして対応出来るのが、本当のプロなのではあるまいか。

送迎してくれた運転手も、客への気配りで市原の説明をしてくれたり、切符の買い方まで教えてくれた。

今日の私は、小さな旅でも大きな収穫があった。それは、各所のトイレを見て回って得た感動である。洗面台を指で触わってみ

ると、つるつるしている。スポンジで良くこすっているからだ。個室の大便器もきれいに磨かれていて、黄ばみがない。流水量も適切だ。流れが弱いと、トイレットペーパーが詰まりやすく、強すぎると、詰まったときに床が水浸しになる。

トイレットペーパーは、客が使いやすいように「三角折り」にされていた。こまめにトイレ巡回をしている証しである。

床は土を踏んだ靴で利用されているにもかかわらず、きれいである。モップがけの回数が多いはずである。

ぞうの国、サユリワールド共にトイレがきれいに清掃されていて、使い心地が良かった。

私の日々の清掃の仕事も、お客様を快適にしているはずである。喜びが湧いた。

私のプロ意識は、日々の業務を時間内にこなすことばかりに心を奪われていた。今回の人手不足の不測の事態への対応力が弱かったのかもしれない。人が手配出来るまで、今まで以上に効率の良い作業方法やスタッフの仕事の割り振りを考える。同時に管理者として、皆の健康状況をしっかりと見ていこう。

孝標女もプロ意識を持って、『更級日記』を書き上げたはずである。

喫茶店を出ると、私はもう一度孝標女の像を見に行った。市女笠に手を添えて、彼女がまぶしそうに空を見上げている。